

## 新しいクリスマス

その時、エルサレムにシメオンという名の人があった。この人は正しい信仰深い人で、イスラエルの慰められるのを待ち望んでいた。また聖霊が彼に宿っていた。そして主のつかわす救主に会うまでは死ぬことはない、聖霊の示しを受けていた。この人が御霊に感じて宮にはいった。すると律法に定めてあることを行うため、両親もその子イエスを連れては行ってきたので、シメオンは幼な子を腕に抱き、神をほめたたえて言った、「主よ、今こそ、あなたはみ言葉のとおりこの僕を安らかに去らせてくださいます、わたしの目が今あなたの救を見たのですから。この救はあなたが万民のまえにお備えになったもので、異邦人を照らす啓示の光、み民イスラエルの栄光であります」。

(ルカ 2:25-32)

祈りが満ちるとしか言いようがない瞬間が、人生にはあると思います。ある祈りはすぐに聞かれ、ある祈りはすぐには聞いてもらえない、そのようなことがどうして起こるのかは僕には分かりません。しかし、すぐには聞かれなかった祈りも、祈り続けるうちに、祈りが満ちるとしか表現しようがない瞬間が、確かにあると思います。そうかと言って、それでは何百回祈ればその祈りが満ちて聞かれるのかというような問題でもないと思います。ヘブル書で言うように、「まだ見ぬものを確かに見ることができる」と信じられる信仰があるということだと思います。その信仰によって、人は祈り続けるのです。シメオンの祈りもそのような祈りの一つであったようです。「救い主を見たい」と祈り続け、そして死ぬまでにそれを確かに見ることができるという信仰をもって、シメオンは祈り続けたに違いありません。その祈りが満ち、救い主を目にした時、シメオンはもう世を去っても良いと思えるほどの喜びに満たされます。

僕はこの「祈りが満ちる」という現象を、「風の教会」を通して見せられました。「風の教会」が建っていくに当たり、本当にいくつものまず越えられないだろうと思う障害を、僕たちは目にしました。宗教法人の問題、土地の問題、建設費の問題、建設会社のこと、などなど。しかしそのたびに、僕たちが祈っていると、まるで「祈りが満ちる」としか言いようがないように、ある瞬間その障害が取り除かれるのを見ました。また僕たちのうちにも、「確かに僕たちは風の教会を見ることができる」という信仰がなくなることはありませんでした。

「風の教会」ができて、その建物をさわる時、僕には、「あっ、これは誰々の祈りだ」と分かるのではないかとさえ思います。そしてシメオンが見たように、僕たちはそこに「異邦人を照らす啓示の光」を見るのです。

祈りと神の御計画との関係は、とても神秘的で、僕にはとても分かりません。人が祈るから、神の御計画が成るのか、それとも、もともと神の御計画があり、それが啓示されて人は祈るのか。そんなことを考えていると、何かとても神秘的な思いに打たれます。僕は、人の祈りと神の御計画が見事に交わる瞬間が歴史にはあると思います。それが多くの人が祈ってきた救い主の御計画が成るクリスマスであり、また「風の教会」

の誕生の瞬間であると信じます。

またシメオンはこの後、マリヤに向かって不思議なことを預言します。「あなた自身もつるぎで胸を刺し貫かれるでしょう」と。実際マリヤは、イエス様の喜びだけではなく、悲しみ、苦しみも身近に見て、十字架での苦しみもすぐそばで見ることになります。それはまさにつるぎで胸を刺されるような痛みの瞬間であったに違いありません。

しかし僕は、そのことを通して、マリヤは初めてイエス様という存在を、本当の意味で知っていったに違いないと思います。十字架で苦しめる主を見て初めて、誕生前に天使が現れたこと、誕生する時の数々の不思議なこと、成人してからの奇跡の数々、それらの本当の意味を知ったのだと思います。それは母の目に映るイエスの姿が、わが子イエスから、救い主キリストへと変わる瞬間でした。

このシメオンのマリヤへの預言は、同時に今の僕たちへの預言であるように思えて仕方ありません。

今年のクリスマスは、白いハトの20周年と重なる特別のクリスマスですが、その第一アドベントの礼拝で、美津子さんは、「私たちは今までは主の喜びを喜ぶだけであったが、これからは主の悲しみを悲しむものとされる」というようなことを話されました。

それを聞いて思い出すことがあります。ある時、一人で僕は集會に遣わされました。その帰り道、車を運転しながらぼんやりと、「そう言えば一人、主を受け入れないで帰った人があったよなあ」とつぶやきながら、その人のことを思っていました。そのとき急に、とても深い悲しみに襲われました。僕は運転できなくなって近くのパーキングエリアに車を止めました。しばらくしてそれは、その人を悲しむ主の悲しみであることが分かりました。僕はそれほどまでに一人の人の思う主の愛の深さに心を打たれました。

主の悲しみや苦しみ、痛みを知ることとは、主の愛をもっともっと深く知ることである。むしろ、ただ喜びだけを与えるのではなく、その痛み、悲しみ、苦しみまでを、被造物に過ぎない僕たちに共有させて下さる主に、僕たちへのとてつもない深い信頼を感じるのです。それは主が新しい意味で、「わが内深くに住まわれる」時です。正確に言うと、本当は出会った瞬間から僕の内に住んで下さっていた主が、どんなに深く深く住んでいて下さったかを知ることができる瞬間です。喜びだけではなく、全てを知ることによって、どんなに深く住んでいた下さったかを知ることです。

20周年と言うと、人で言えばちょうど成人式を迎えるということ。いよいよ僕たちも大人になるということ。大人と子供の違いつて何だろうか。子供はただ愛するもののために生きようとしますが、大人は自分が愛するもののために死ぬことができる場所が違う。そしてキリストのために死ぬことは、被造物の最高の幸せです。キリストのために死ぬとは、「自分が消えて、ただ主のさんびだけが残るのを心から喜ぶ」ということだと信じます。その時僕たちは、キリストの全き愛の世界を見るのです。

主よ、異邦人を照らす啓示の光、「風の教会」を見た僕たちは、あなたの死をも共にします。人の思いは風と変えられ、ただ主の栄光と願いだけが残りますように。